



木質化ショールームへようこそ！

「都市に森を」―秋田プライウッドが提案する「合板」活用の新たな可能性



「現し」の合板が圧感の玄関ホール



超厚合板



超厚合板



木を捨てずに使い切った「究極のカーボンストックテーブル」

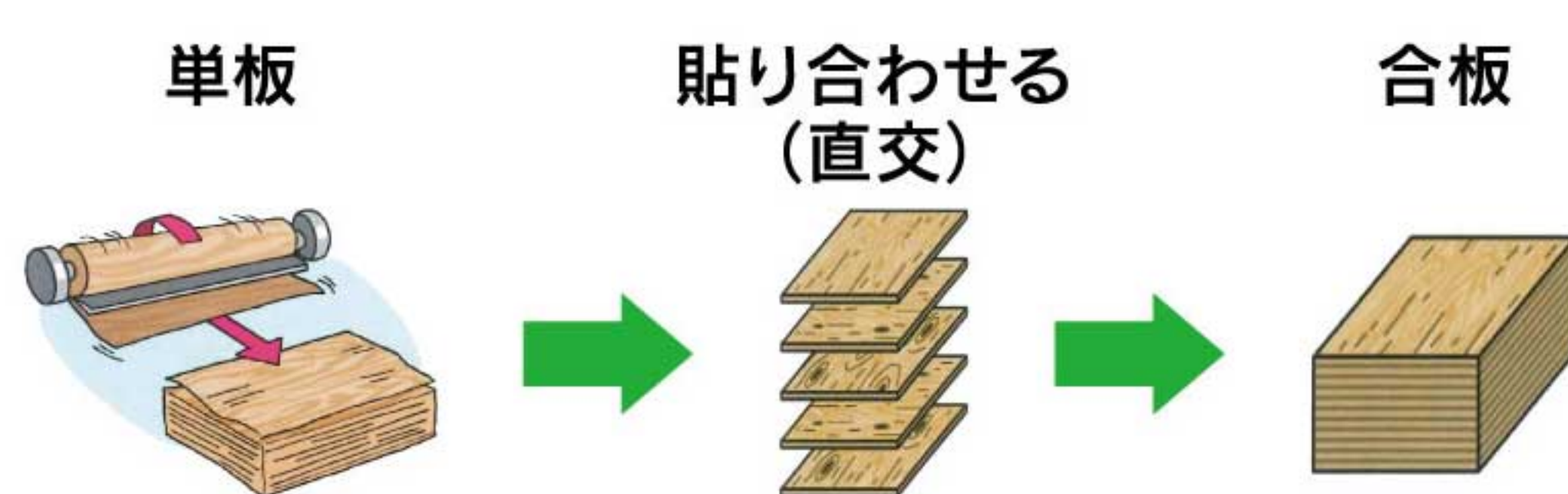


合板の端材を組み合わせ、積層面を“魅せる”デザイン

テーブルの裏面はあえて不揃いでブサブサのままカーボンストックを実現

「合板」は、木のミルフィーユ

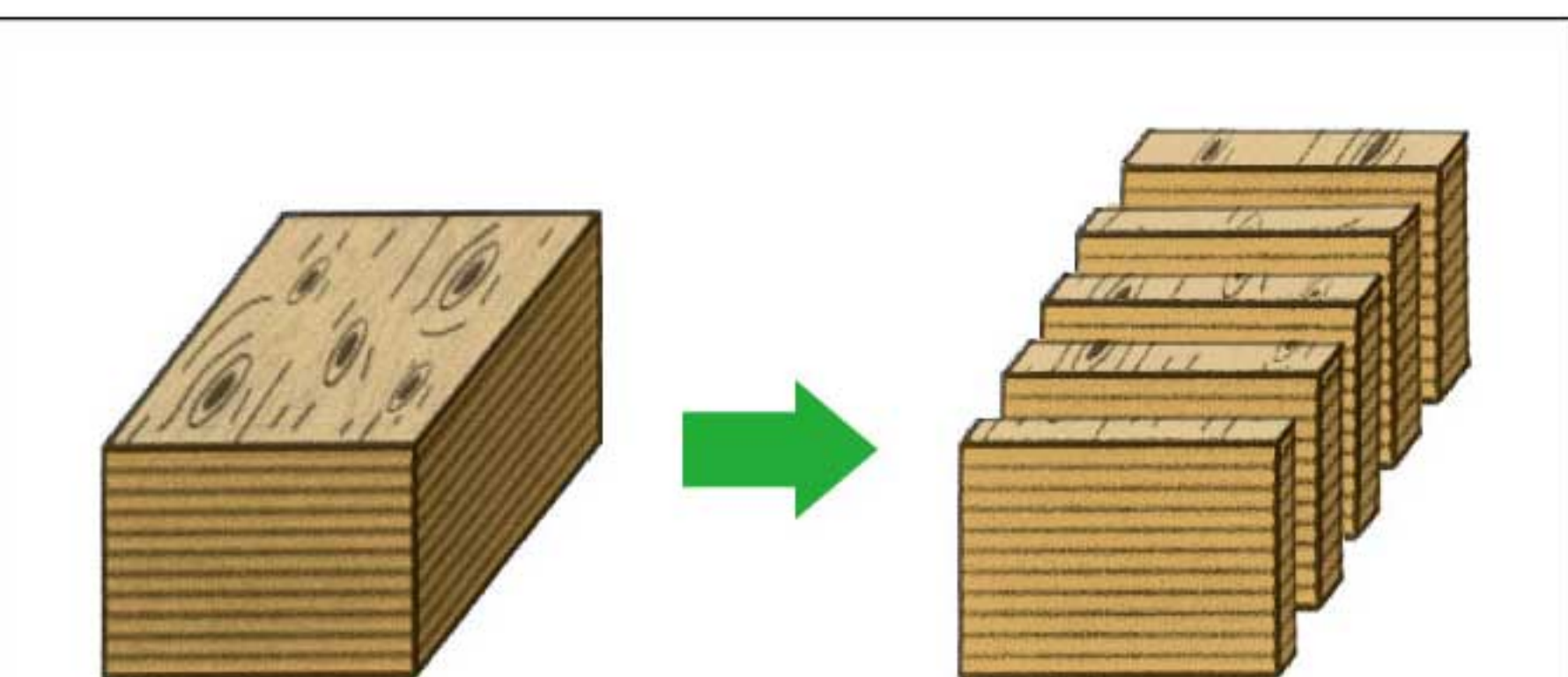
丸太(原木)を、大根の柱むきのように2〜3ミリに薄く切ったもの(単板)を、木目(繊維方向)が直角に交わるように互い違いに貼り合わせた、ミルフィーユ状の板材。木材の利用しにくい部分を無駄なく使うために、製造技術で作り出す木質建材。「熱伝導率が少ない」「調湿作用を持つ」など木材の性質を備えた上で、伸び縮みが少なく、耐久性にも優れた素材として、住宅の構造部材を中心に広く使われている。



圧倒的なデザインで来客をお出迎え
リノベーションされた厚生棟は、木をふんだんに使った意匠で来客を出迎える。
天井から床まで、左右の壁全面を合板の積層面の組み合わせで大胆にデザインした玄関ホールは、濃い茶色から白まで、合板の切断面積層

面が生み出す多様な色味のコントラストの美しさが圧巻だ。
従来「隠れる」合板を住居材として魅せる
秋田プライウッドが提案する合板の新たな活用法は、ポイントが大きく3点ある。ひとつは、「現し」の建築手法で合板の美しさを前面に出す「見せ方」の提案。

通常は建物の構造用として、壁紙や天井板に隠れてしまいう合板を「仕上材」として使用することで、従来にはない意匠を生み出す。
単板を貼り合わせた合板をさらに何層にも重ね、「縦の方向」にス



縦のスライスで生み出される積層面の美しさ

ライスすることで、表面の木目とは全く違う模様が生まれる。この積層面の美しさをそのまま壁やテーブルの天板に使用することで、味わいのあるデザインを生み出す。
究極のカーボンストックテーブル
二つ目は「木を可能な限り無駄なく使い切る」こと。合板製品を成型する過程で切り落とされた端材や、丸太を剥いて最後に残る「剥き芯」なども、捨てたり燃料にしたりせずさまざまなに活用する。
2階のミーティングルーム(2室)に配置したテーブルは、厚さ24ミリの杉合板の端材を貼り合わせ、表面を合板の木口の積層面だけで表現した一方、無加工の裏側は端材が不揃いなのでブサブサ。木を最後まで使い切った製品は究極のカーボンストックテーブル」と名付けられた。
3階会議室のテーブルは、プレカットで生じた端材を組み合わせた

強度の高い超厚合板は骨組みにも使用可能
三つ目は、従来の用途である「構造部材」にとどまらず、「躯体」(建物本体の骨組み)としての活用も可能なこと。合板の元となる「単板」を何層にも重ね合板は強度が高いことから、住宅の梁など、従来、製材品を利用していただる箇所への使用拡大を目指す。
「都市に森を」本造木質化の意義
木は、燃やせば二酸化炭素(CO₂)を排出して地球温暖化の要因になるが、木のまま

使っている間は炭素をストックし、CO₂を排出しない。建物に木を多用することは、木を植えることと同じように、社会の要請である「カーボニュートラル」(CO₂排出抑制)への貢献につながる意味を持つ。
「これからの社会は、人口減少に伴い、木を使う総量も減少が避けられない。それでも、木の出番は増やせる。鉄筋コンクリート造や鉄骨造の建物が多い都市部でも、内装の木質化によつて、都市に森を増やすことができる」と、秋田プライウッドの金田憲明取締役総務経理部長は力をこめる。



玄関アプローチの壁面には、丸太から合板の材料を剥きとり、最後に残った「剥き芯」を並べて、ログハウス調の風合いのある仕上げを施した。

室内の装いに、家具に、新感覚の美しさ。
「木づかい」でカーボニュートラルに貢献する
秋田プライウッド

植える、育てる、収穫する、上手に使う、そしてまた植える。
永遠の緑の循環を守り、持続可能な社会の実現を目指します。



秋田プライウッド株式会社

〒010-0941 秋田県秋田市川尻町字大川反232
Tel:018-823-8511 Fax:018-862-1513

